
さらば、初恋。

霧谷香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さらば、初恋。

【ZPDF】

Z9620A

【作者名】

霧谷香住

【あらすじ】

菜々は、高校卒業を前に、長い間片思いをしていた三島に告白した。…が、見事玉砕。それから気まずくて三島を避けているうちに、卒業の日を迎えてしまった。

高校卒業の一週間前。私はフフられた。

『じめん。俺、お前のことそんな風に思えない』

メールでの告白。

五年越しの恋は、ものの五分後の返信で打ち砕かれた。

奴、三島健一は、私、原田菜々の、初恋の相手だった。

三島は、中一から高一まで、同じクラスで、やたらと私と縁がつた。同じ委員だつたり、部活が同じバスケで、キャプテンをやつてたり。いわゆる腐れ縁だつた。

『また原田と一緒にか』

『それはこいつのセリフ！ 私の行く先行く先に現れないでよねー』

『誰がするかよ』

そんなやりとりが、ショッキングだった。

なんていうか、喋る時はほぼ毎回喧嘩腰で（私が一方的にだけど）色んな言い合いでほとんどだつたけど、それだけじゃなかつた。ちゃんとまともな話もすることがあつて、中でも一番覚えてるのは、中一の夏休み、部活帰りにたまたま一緒にになって、話してた時のこと。

『なんつかさあ、いいよね、男子は。ちゃんと部活できてる』

先輩が引退して、私がキャプテンになりたてだった頃、私は色々思つところがあつて、三島にそつそつと話しはじめてた。

『何で。女社だつて部活やつてんじやん』

『やうじやなくてさ。なんていつか、みんな覇氣がなくなつたっていつか…部活に對して淡泊になつてるとこあるんだよね。部活をしたくてやつてるつてこうんじやなくて、単に部活が予定にあるから来てやつてゐてはつてこうの?』

『なる程。やつてゐてよつ、やひれてる。みたいな感じか』

『やつー。めあたれー。先生が居ない時なんか、手抜きまくつてんの。特に一年。それが一年まで伝染してきてんの。注意しても、その場だけですべにだらける…』

『分かる分かる。確かに上がしつかりしてないと、下はもつと手を抜くよな。注意したらしで、先輩達だつてやつてないじやないですかー。とか言いやがるんだよな』

『そつなんだよね…だから注意しづら…』

『じつは…それじゃダメだ』

三島はその時こきなり怒つたような口調になつた。

『原田がそんなこと言つてびひすんだよ。お前がキャプテンなんだよ。お前が言わなくて誰が言つて聞くんだよ』

『キャプテンだからつて偉そにしていいわけないじやん』

その時私は、誰にも言えないでため込んでたものを三島に言つて

た。

不安とか、苛立ちとか、自分のやり切れなさを、三疊にせきを出していた。

『……俺は、そんなん氣にしてねえよ。だから部屋には戻つたことちやんと言つてゐるし』

『……男子と女子は違うんだよ』

『違わねえよ。俺は、自分が間違つてると思わねえから言つてんだ。原田だつて何も間違つてないだろ。ちやんと部活したいつて思つのは当たり前のことだ。それを言わねえと何にもなんねえよ。……何も言わないで分かってくれなんて都合よすがね』

『分かってるよ。でも……なんか言つてそれで反感買つたらそれこそ部活できなくなるし』

『だからつけてこのままでいいのか？ 何も言わないでウジウジしたまま続けていいのか？』

『……よくなによ。でも、ひとつ言えばいいか分かんないし……』

『思つたまま言えばいいんだよ。原田が嫌だと黙つひとととか、ひとつしたいのかとか……ちやんと云ふとすれば云わるよ

『……うさん』

それでも、私には自信がなかつた。

『何だよ、らしくねえなあ。お前はいつも女のくせに俺に食いかかつて来んじゃねえか。その勢いはどうしたよ?』

『ひどいー。私だつてねえ、女の子なの! 人並みに悩んで落ち込むことだつてあるんだからねー!』

『わうわう。それでこそこつもの原田だ』

三島は、満足そうに言った。

『心配すんな。原田は何も間違つてない。もし、お前が全部ぶつけだめだつたら、特別に男子の方で受け入れてやるからよ』

その時の三島の言葉が、泣いてしまってわうになるくらい嬉しくて、心強かつた。

三島のおかげで、私は皆に思つてゐることが言えて、みんな、すぐに分かつてくれた。初めからこうすればよかつたんだつてくらい、あつたりと。

あの時から、私は三島にだけ、本音で、素の自分を見せられるようになつた。そして、それまで男の子になんか全く興味なかつたのに、三島のことが、好きになつた。

高二になつて、初めてクラスが離れて、部活も引退して、三島と話す機会が少なくなつた。しかも、久しぶりに話した会話の内容は、スポーツ推薦で地方の大学に受かつたことだった。

卒業したらもう本当に離れ離れになる。だから、悩みに悩み抜いて、最後に三島に告白した。

分かつてた。どうなるかなんて、考えるまでもなかつた。あいつが私のことを、女として見てるはずなかつたんだから。でも、思った以上にショックだつた。

結果は分かつてたはずなのに…

あの後、メールの返信に対して

「そつか。わかつた。あんまり気にないで… 伝えたかっただけだから。これからもいい友達でいようね!」

つて、返そづとしたけど、送信ボタンが押せなくて、そのままだ。

学校でも顔を合わせないよつて、警戒しながら一週間を過ぎついて、卒業の日を迎えた。

「先輩！ 卒業おめでとうございまーす！」

卒業式が終わつて、部室前で女子バスケ部が集まつて、後輩から花束や色紙、プレゼントをもらつた。

「ありがとー！ また遊びに来るからね」

「はー！ あ、先輩達、春休みに皆でビーチで先輩たちのパーティーしようつて話してたんですよ」

「あ、いいね！ しようみー！ もちろん奢りだよね？」

「えー？ それはちよつと……」

「あははっ！ 「冗談だつて」

後輩達と雑談をしながら、高校時代最後の時間をかみしめていた。それは、他の部も一緒に、部室前には、かなりたくさんの生徒がいた。

その中には、男子バスケの奴の姿も……でも、私は見ないよとにした。

「ねえ、菜々。いいの？」このままで
そろそろ行こうかとしてた時、同じバスケ部で副キャプテンをやつてた優に言われた。

「え？ 何が？」

「三島のこと。」

優にだけは、私が三島を好きだつてことを話してた。もちろん、告白してフリれたつてこと。

「あんた、ずっとあからさまに三島のこと避けて…全然喋ってもなんいんでしょ？ いいの？ 卒業したらもう会えないかもしけないんだよ」

「…分かってるよ。でもいいの。私は言つだけのことば言つたの。だから、もういい」

『初恋は実らない』

そうこののは知つてたし、私の恋も、そのセオリー通りになつただけ。

それに、言えずに終わつたよりはよかつた氣がある。これで心置きなく、次に進めるから。

「菜々ちゃん…三島に告ぐるかどうか悩んでた時、言つてたよね。『どうせ断られるんだし、それなら何も言わないで今のままの方がいい』って。それでもちゃんと言つたんでしょう？　なのにならのままだったら本当に前みたいに戻れなくなるよ。それでいいの？』
優は痛いところを突いてくる。

「そうだ。私は、三島に告白したが、私たちの今までの関係が崩れるかもしれないと思って、それは嫌だと思ったのに、三島に告白した。どうせダメだと分かって、それでも言つた。

『実際、今のままだと、もう三島と話すことはないと想いつ。

「そりやあ…正直なところ嫌だから、今更戻るなんて無理じゃん。だから、いじょ。今そのまま会わない方が、すんなり忘れられるだろう」

「うー

「…三島は嫌だと思つよ」

優は神妙に言つた。

「三島は菜々の気持ちをちゃんと正直に思えてくれたんじゃん。それなのに菜々がそれだったら三島に対して失礼だよ。今ままでどうしたらいいのか分からなくては、三島の方だよ。ちゃんと三島の

『気持ちも考えなよ』

三島の気持ち……

三島は、多分、私のことを女友達とか……もしかしたら、単に中学生からの同級生で腐れ縁の奴としか思つてなかつたと思つ。そんな奴にいきなり、ずっと好きだつたとか言われたら、三島だつて、どうしたらしいのか分からぬよね……。もしかしたら、三島に変に気に病ませてるかも知れない……

「……そうだよね。私が、ちゃんとしないといけないんだよね。……うん。私、ちゃんと三島に話してみるよ」

私がちやんと白黒つけよう。フランクたけど、せめて今までみたいに何でも言い合える仲でいたい。友達だつて、構わないから。

「うん。頑張れ！」

優は、力強く言つてくれた。

うん！頑張る！

私は、男子バスケ部が集まつてゐる場所へ行つた。三島は、一番背が高いからすぐ分かる。

「みつ……三島つー！」

三島を呼ぶ、その三文字の声が震えた。こんなのは、初めてだつた。

三島はすぐ二つ巴を向いた。

「…原田」

私を見て、三島は驚いたような、何にしても、見たことのない顔をしていた。

「あの…その…は、話があるんだけど……」

やばい…いや何言えばいいのか分からん…。

「えつと…」

言葉が、出てこないっ！

「じめんつ！」

私は、耐えられなくて、その場から、走って逃げてしまった。

ああもうつ！ 何してんの私！ 何逃げてんの！ でも、今更何を言つていいいのか分かんないんだよ！

私は走りながら、自分に対する叱咤と言い訳を繰り返していた。

「…田！ …原田！」

後ろから、声がした。振り返ると、三島が走って追い掛けてきていた。

「なつ…何で追い掛けくんの…」

私は走りながら叫んだ。

「原田が逃げるからだろ！」

三島も後ろから叫んできた。

「逃げるから追いかけるなんて、あなたは熊か！　ていうか逃げてないし！」

「逃げてないなら止まれよ！」

「やだつー！」

「…つんのヤロツー！」

三島は、どんどん距離を詰めてきて、私の真後ろについた。

「ちゅうとつ…」
「ち来んなバカ！」

「お前にだけは…言われたくなえつて…のー！」

三島が私の腕を掴んだ。いきなり後ろに引っ張られて、転びそうになるのを必死に堪えた。

「…放せつー！　バカー！」

私は、三島の手を振り解こうとした。

「だから、お前には、言われたく…ねえ…」

走ったせいで、三島は前屈みになつて、息を乱していた。私も、いきなり止まつたせいで心臓がバクバクしている。

やみくもに走つて立ち止まつたそこは、裏庭だつた。誰もいなくて、静かだつた。

お互に暫く何も言わないまま、呼吸を整えていた。そして、三島が私の腕を放して、体を上げた。

「俺も、お前に言いたいことがあつたんだよ」
手の甲で額の汗を拭いながら、三島が言つた。

「あのメール…なんか…いきなり、どうしたらいこのか分かんな
かつた」

やつぱつ、そのこと…。

「いいよー。そんなの気にしないで。もひ、忘れていいから」

今こじこじでまたフラれるなんて、冗談じやない。

「忘れられたかよー」

「え…？」

三島の言葉に、私は面食らつた。

「俺、お前が俺のことそつそつ風に思つてたなんて考えもしなかつたし、全然気付かなかつたし…」

…そりや、気付かれないようにしてたし。いくら三島の前では言いたいことが言えるつていつも、こればっかりは隠してきたんだ

よ。

「お前が俺のこと、つて知つて、色々想像してみたんだ。…そしたら…」

そしたら…？

「全つ然想像できん！」

三島はやたらと力を込めて言つた。そして私はやたらと強く頭をブン殴られたような衝撃を食らつた。

神様…懺悔致します。今、私は少し期待しておりました。漫画でよくあるような大どんでん返しが起るのかと、少し浮かれていました。

実際そんなこと、あるはずじでござんせんもんねつ！

「なんていうか、もし、俺と原田が付き合つことにになつたら、データしたり手繋いだりとか…お前とはそういうの全く想像できねえ！」

そこまで言つてくれちゃいますか…

「悪かつたなあ！ 私だつてそんなの想像できないし、したくもないし！」

「…何だよそれ。矛盾してんぞ」

「そうだよ！ 矛盾してるよ！ でも…それでも私はあなたのことを好きだったの！ しじうがないでしょ！」

私は、勢いで初めて面と向かつて、三島に好きだと言つてしまつた。

ものすじぐく、死ぬほど恥ずかしいつつ！

「お前……そんなこと言う奴だつたか……？」

ぽかんとした様子で、三島は言つた。それがかなりムカついた。

「あんたはつ……人の傷口えぐつて塩擦り込むような」とばつか言うな！ それだからずっと彼女ができないんだよ！」

「はあ！？ そんなのお前だつて一緒だろ！ つうかお前なんかそのずっと彼女いなかつた奴にフ腊れてんだろ！」

「あんたが言うな！ あんたは私にそう言える立場じやないつつの……」

「……そりや……そりか……」

三島が妙に納得したような様子で言つた。ものすじぐく間抜けな顔で、それにも何だかムカついた。でも、もうバカバカしくなつて、私は何も言わなかつた。

「…………ぶつ！」

暫く黙つたと思ったら、三島はいきなり吹き出した。

「な……何……」

「……くくく……くくくくく……」

三島は、顔を背けて、肩を震わせて、笑いを堪えるようにしながら、笑い始めた。

「何！？ 今の笑うところじゃないでしょ！…」

私は、三島のその態度にまた怒りを爆発しそうになつた。

「わ……悪い……何かせ、やつぱは原田とは……」いつになつて、思つてわ…」

笑いを鎮めながら、三島は言った。

「え…？」

意味が分からず、私は顔をしかめた。

三島は、咳払いを一つして、真剣な顔になる。

「原田……俺はさ、お前のこと、俺が一番気を許せる奴だと思つてる。でも、それは、女として好きとか…そういう風じやなくて、その…何つか…人としてっ！ つていうかさ…」

三島は、じぶらもじぶらといふか、必死に言葉を探すよつと話していた。

「付き合ひとか…そういう風になると、男と女じやん。俺は、原田とは、そういう別もんじやなくて、対等にいられる方がいいんだ。今までそんな感じで、すづぎえ楽しかつたし……だからこれからもさ、そういうのでいたいんだよ。何でも言い合える親友みたいな関係でいたいんだよ」

…三島のバカヤロー……

「…て、ことは何？ やつぱり私はあんたにとつて女として見えてなぐで、それどころか同じ男として見てたつてわけ？」

悔しい…

「なつ…違うって！だから、人としてだつてのー。」

悔しいよ…

「分かつてるよ。ていうか、もしそこで人としてじやなくて、何か別の動物だつたら、さすがにキレるけど」

私は、その時の気持ちを誤魔化すように、『冗談を言つた。

「だから、それでいいからわ…私を『親友みたい』じゃなくて、ちやんとあんたの『親友』として扱つてよ…。じやないと、私は、中途半端なままじゃん」

「…ね…おお！当たり前だ！」

三島は、はつきりと言つてくれた。

本当に、悔しいよ…。

中学から一緒だったのに、一度も女だと思われなかつたつてことと、振り向かせることができなかつたつてことも、そうだけど…

でも、何より悔しいのは、私は、三島のそういう、変にいい奴なところが好きだつたんだよ…。フラれてからもそういう風に思うなんて…。

「…うん。三島は、私の親友だよー今まで通りねー！」

私も、力を込めて言つた。

これは口に出して言えないけど、多分、まだ暫くは三島のことを好きだと思つ。五年も続いた気持ちをふつくるのは、そう簡単にできないから…。

でも、それぐらい許してよね、親友！

「戻ろ!」三島。私は三年でこれからカラオケ行こうって言つてたんだ

「ああ、俺らも部員でメシ食こに行くんだ」

部室前に戻りながら、私たちは取り留めのない会話をしていた。以前と何ら変わりない調子で、言いたいことを言つて言い返して…。フランクされた女とフツた男だとは思えないくらいだった。

ソレにして接することができるのは、相手が三島だったからだと思う。

「あれ…」

部室前に戻つてきたら、生徒は皆帰つてしまつたようで、男女ともバスケット部の部員はいなかつた。

「もしかして、置いてかれた?」

私はそう言いながらスカートのポケットの中の携帯を出した。メールが来てる。優からだ。

『時間かかるみたいだから、先行つてるからね。ちやんと話つけてからあいでよ!』

優には、一番にお礼を言わないといけない。優に背中押してもらわなかつたら、きっとあのまま終わつてた。

本当にありがとうございました。優…

「あつ…」

自分の携帯を見た三島が声を上げた。

「あごつらつ！ 三時までに来なかつたら俺の奢りだつて…勝手に決めてんじゃねえよ！」

一人でそんなことを叫んでいる。時間を見てみると、もう一時半を過ぎていた。三十分弱で行ける場所なんだろうか…。

「じゃあ俺行くな！」

三島は、慌ただしく鞄を持って、走っていく。

「じゃあな、原田！」

振り向きながらまたそつづつて、三島は私から離れていく。

「…三島つ…」

私は、その背中に元に叫んだ。三島は、足を止めて振り返った。

「またねつー三島ー」

もしかしたら、もう会えないなことのなにように、私は叫んだ。

「次に会つた時に、私が今より可愛くなつて、美人になつて、あんた好みの女になつても…私をついたこと、後悔すんなよー！」

今、私はちやんと笑えてると思う。初恋の相手が、三島でよかつ

た。

「…そういうことは、実際なつてから言えよなつー。つうか、そう言つならなつてみせろよー。」

三島も笑いながら返してくれた。

「またなー！ 原田。頑張れよー。」

三島は、手をあげて最後にそう呟んで、走つて行つた。

またな、親友。さらば、初恋。

(後書き)

ここまで読んで下せつ、ありがとうございます。短編に挑戦してみました。私の過去の経験も踏まえてできた作品です。（ノンフィクションというわけではありませんが。）何か感想を頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9620a/>

さらば、初恋。

2010年10月31日02時56分発行